

「前日譚・初恋を知ったお嬢様、想い人の誘拐を計画する」

「ねえリナリー、ちょっと聞いてほしい話があるんだけど♪」

ある日のこと。

学校からお戻りになられた澄花お嬢様が私の姿を見つけるなり、高揚した調子で声をかけてきました。

「……はあ」

口からひとりでに、ため息が漏れてしまいます。

お嬢様との付き合いはもう十年以上。こういう表情をされている時の『聞いてほしい話』が碌でもない内容だということは経験上、嫌と言うほど理解していました。

そこで渋々ながら、詳しい話を伺ってみると――

「とうとう出会ってしまったのよ、私の運命の殿方と！　身体にびりびり～って電流が入ったような心地を覚えてね？　私思ったわ、『この人以外ありえない』って♪」

「なるほど。一目惚れというやつですか」

「そう、だからリナリーに手伝ってほしくて！」

「手伝い、と言われましても。わたくし、恋愛の経験はからっきしで――」

「一切不要よ、恋愛の経験なんて！　私があなたにお願いしたいのは、いっこだけ」

お嬢様は、満面に浮かんだ喜色をさらに強めながら私に迫り、言葉を続けます。

「私の彼を、このお屋敷に拉致してきてほしいの。あなたなら楽勝でしょ？　睡眠薬なりスタンガンなり使って、夜道で眠らせればいいんだもの！」

「……………」

……想像を遥かに上回るろくでなしっぷりでした。

まったくこの人は。いつもいつも、わたくしの想像のナナメ上を行かれます。

「……お嬢様の傍にいと、悩みが尽きませんね。本当に」
「まあ、さっそく誘拐の計画を練ってくれているのね。さすがは私のメイドだわ♪」

お嬢様の耳には、私の皮肉など届かないようです。これが恋の力というのでしょうか。
ともあれ、お嬢様の意図を聞いておく必要はあるでしょう。

「一応お聞きしますが、誘拐する必要はあるのでしょうか。真っ当に口説いて、普通に恋愛すればよいのでは？ お嬢様ほどのお方であれば、容易く籠絡できるはずです」
ついでに、常識的な観点から説得を試みてみます。無論、徒労に終わってしまうことは承知の上ですが。

「あら、聡明なリナリーにしては愚かな質問ね？」
「こんなにお金持ちで、容姿にも能力にも恵まれている私に口説かれて、断る男なんているわけがないじゃない。遅かれ早かれ私のモノになるのなら、手っ取り早い手段を選ぶべきよ」
途轍もない自信です。誇張や見栄がまったく絡んでいないのが、余計にたちが悪い。

「まあ、否定はしませんが……万が一、断られたら？ 『警察に突き出してやる』などと言い出したら？」
「その場合は仕方ありません。このお屋敷の中で一生を終えてもらいましょう。一度、男性の身体を好き勝手してみたかったので、それはそれで楽しめます」
笑顔でなんてことを仰るのでしょうか、このお嬢様は。

「まったくこの人は……はあ」
幾つ法を犯すことになるのかとか、そもそもこの私に誘拐など実行可能なのか、といった常識的な思考は頭にないのでしょうか。
まあ、今更そんなものをお嬢様に期待するつもりはありませんが。

「私からの命令は以上よ。返事は、リナリー？」

「はい、委細承知しました。……と言う他ありませんね。私の立場上」

「もう、リナリーったら。そんなに拗ねないでちょうだい。大丈夫、彼をオトした暁にはちゃんとお裾分けしてあげるから♪」

「お裾分け、と言いますと？」

どんなご褒美をチラつかせるつもりなのでしょう。

なにを頂けるのだとしても、私の心が沸き立つ未来は見えませんが……。

「私、知ってるのよ。毎晩、あなたがベッドの中で……なにをしているのか？」

……ん？

「あなた、溜まってるんでしょ？ スマホでえっちな動画を見ながら、自分を慰めてるわよね。それからお仕事中にもお手洗いとかでこっそり——むぐっ」

「ど、どうして知ってるんですか——いや！ なにを言ってるんですかお嬢様は……！？」

慌ててお嬢様の口を塞ぎにかかりますが、なんの意味もありません。

彼女は始めから、見透かしていたのです。仕事に支障を来たすほど、えっちな欲望を溜め込んでいる……わたくしの現状を。

「私の『彼』をこのお屋敷に閉じ込めて、時間も忘れて。私たち三人でずーっといちゃいちゃできたら……最高だと思わない？」

お嬢様のその囁きに、胸が高鳴ってしまう。

お腹の奥が反応して……熱を帯びてしまう。

「……どう、リナリー？ 少しはやる気が出てきたんじゃない？」

幼げな容姿に相応しくない妖艶な笑みを浮かべ、わたくしをじっと見つめるお嬢様。

そんな彼女と見つめ合いながら、わたくしはしばし言葉に迷い……。

「ですから、言っているではありませんか。私の立場上『承知しました』と言う他ない、と」

お嬢様の視線から逃げるように顔を背けながら、答えを返します。

「ふふふっ♪ 素直じゃないんだから。頬が緩んじゃってるわよ？」

お嬢様のその言葉を聞いたわたくしは驚き、窓ガラスへと目を向けます。

そこでようやく気がついたのです。自分が、期待と興奮の入り混じった『メス』の表情を浮かべていることに。

はぁ、とまた一つため息をつきながら、呟きます。

「本当に、敵いませんね……お嬢様には」

こうして私は、お嬢様が一目惚れしたという見ず知らずの男に夜襲をかけることになったのです。

ただ道端を歩いていただけでやっかいな女に目をつけられ、拉致監禁されることになってしまったその男には、正直同情を禁じ得ませんが、仕方ありません。

お嬢様の幸せのため、力を尽くすこと。それがわたくしの役目なのですから。